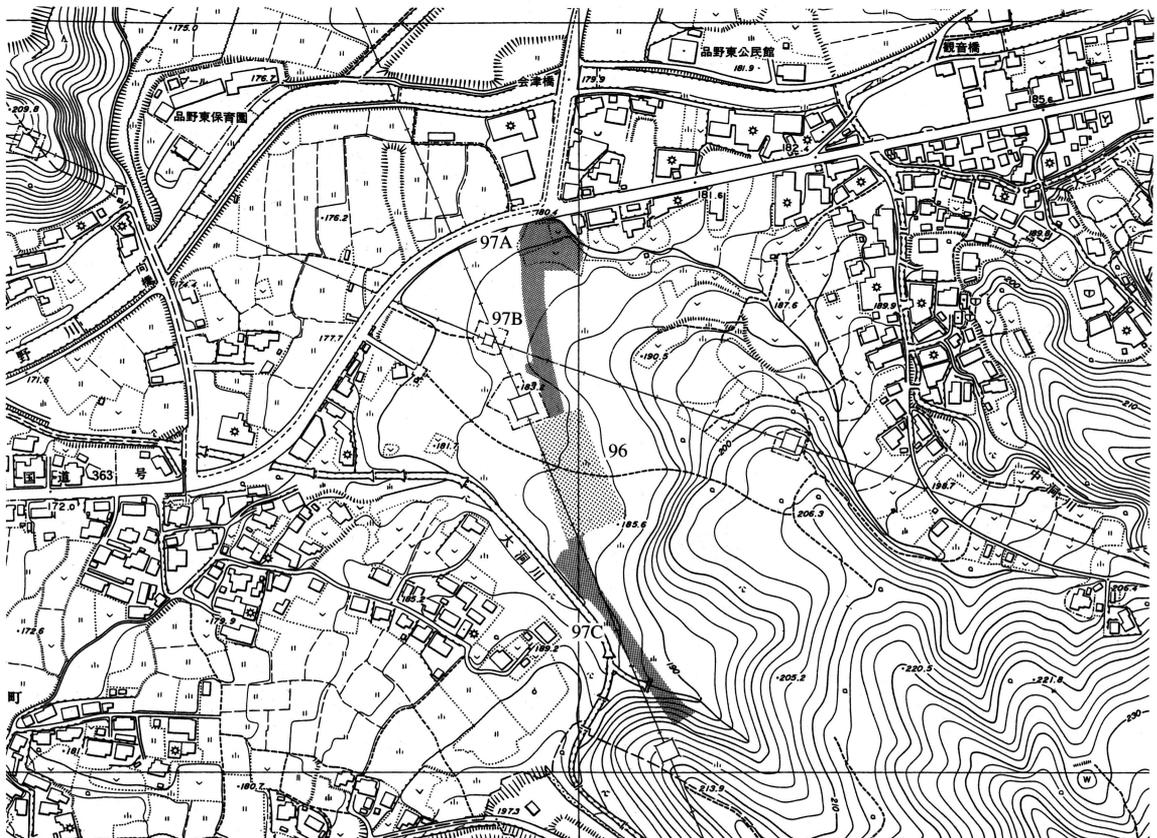


かみしなの 上品野遺跡

調査の経過 上品野遺跡（瀬戸市上品野地内）は、瀬戸市の北東部に位置する品野盆地を北西に望む丘陵斜面から段丘端部に立地する。発掘調査は、昨年度より東海環状自動車道建設に伴う事前調査として実施している。昨年度の調査では、縄文時代後・晩期かと考えられる「ドングリピット」4基をはじめ中世の溝・土坑と縄文時代から近世にかけての遺物が出土する大きな谷状地形が検出された。本年度の調査は、建設省ならびに愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、東海環状線関連3,640㎡、国道363号線拡幅関連360㎡の総計4,000㎡をA～Cの3調査区に分けて平成9年8月より平成10年3月にかけて実施した。以下、各調査区ごとにその概要を記す。

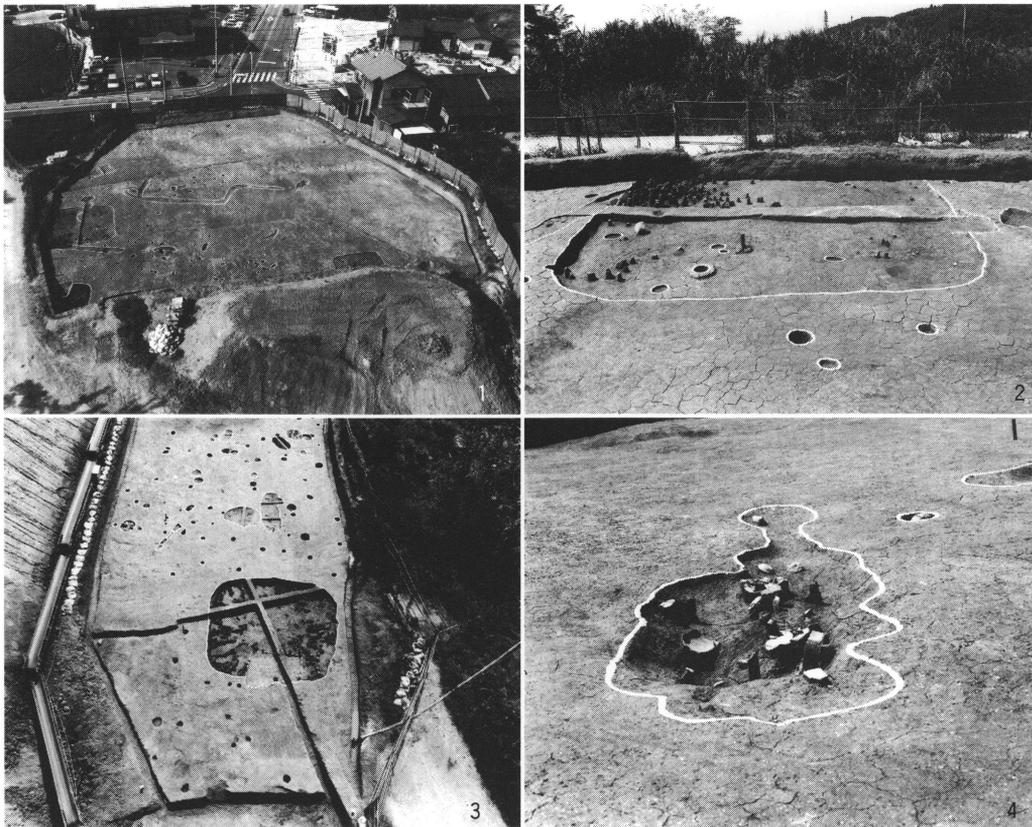
遺跡の基本層序 A・B区において、基本層序は上からⅠ層・現耕作土、Ⅱ層・旧耕作土ないし開墾や造成による搬土、Ⅲ層・黒茶褐色土（遺物包含層）、Ⅳ層・赤褐色ないし黄褐色粘質土（段丘面：井関弘太郎氏の御教示によれば名古屋台地の熱田層に相当する）の順で、遺構はいずれもⅢ層の直下、Ⅳ層上面で検出された。C区では、現地表面から深さ3mほどが近代の造成に伴う搬土で、造成により旧地形が大きく改変されており、搬土ないし工事による攪乱面直下が遺構検出面となった。



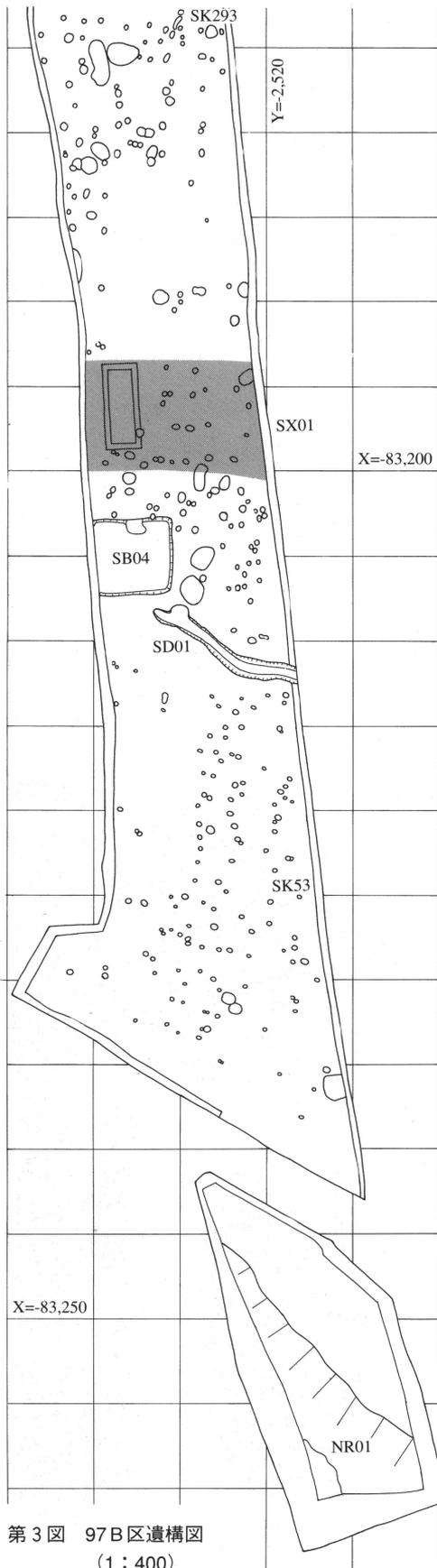
第1図 調査区位置図（1：5000）



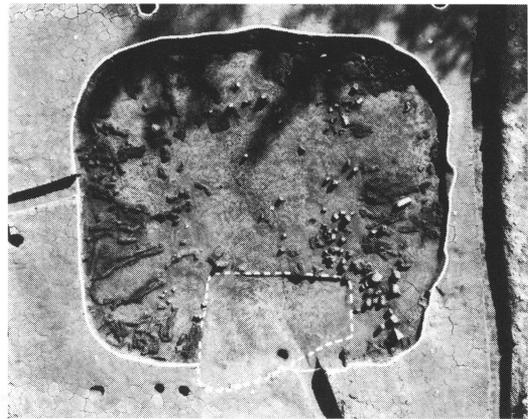
第2図 97A区遺構図 (1:400)



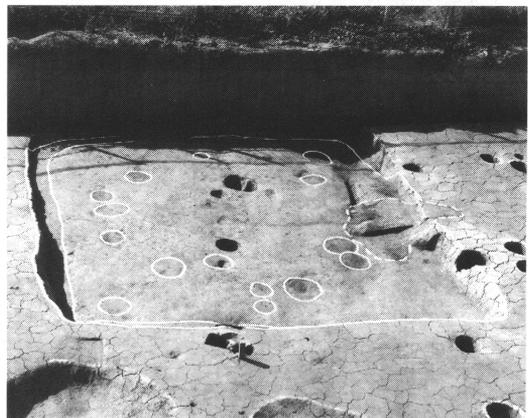
1 97A区全景 (南から) 2 97A区SB01 (東から) 3 97A・B区SB02 (北から) 4 97A区SK64 (北から)



97B区全景 (南から)



97A・B区SB02 (上から)



97B区SB04 (東から)



97B区SD01 (東から)

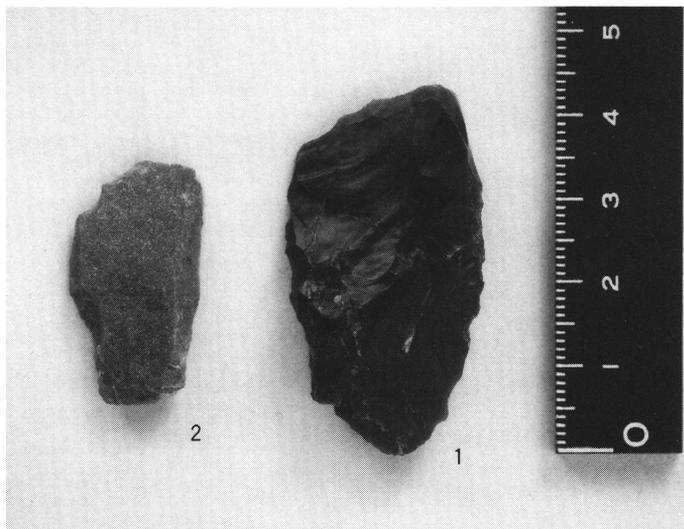
A区の概要 A区は遺跡が立地する段丘面の端部で、全調査区の北端部分に当たる。調査直前の地形は、南より北に下がる三段の水田面となっているなど後世の造成が進んでいた。遺構としては弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居4棟、その内の1棟（S B02）は調査区の南西隅に位置し、住居の一部分で炭化材が出土する焼失家屋であった。この他には平安時代の土坑が数基、鎌倉時代の溝・土坑多数が検出された。また遺物包含層からは、室町から戦国時代の土器・陶磁器および中国磁器の出土をみた。中国磁器はいずれも碗類で、その出土量は尾張平野の中世遺跡と変わらないとの印象を受ける。いわゆる古瀬戸の窯業地の集落に中国磁器の碗類が数多くもたらされていることが注目される。（北村和宏）

B区の概要 B区はA区の南西部分に接し96年度調査区の北側に位置する。検出した遺構は、住居跡、土坑、溝、柱穴等である。主な遺構として、旧石器時代の石器と剥片が集中して出土したS X01、弥生時代末から古墳時代初にかけての住居1棟（S B02）、奈良時代末から平安時代にかけての住居1棟（S B04）と平安時代の土坑2基（S K53・S K293）と溝1条（S D01）を検出した。

S X01は、B区のほぼ中央で、幅5m、地表面からの深さ1.2mから1.5mを測り、西側に傾斜した浅い凹地状を呈し、段丘面上に立地する。層位はIV層の赤褐色粘質土を基準とし、にぶい黄褐色土、褐色土（風化した花崗岩を多く含み粘性強い）を埋土とする。遺物



上左 97B区SX01（東から）
上右 97B区SX01旧石器出土状況

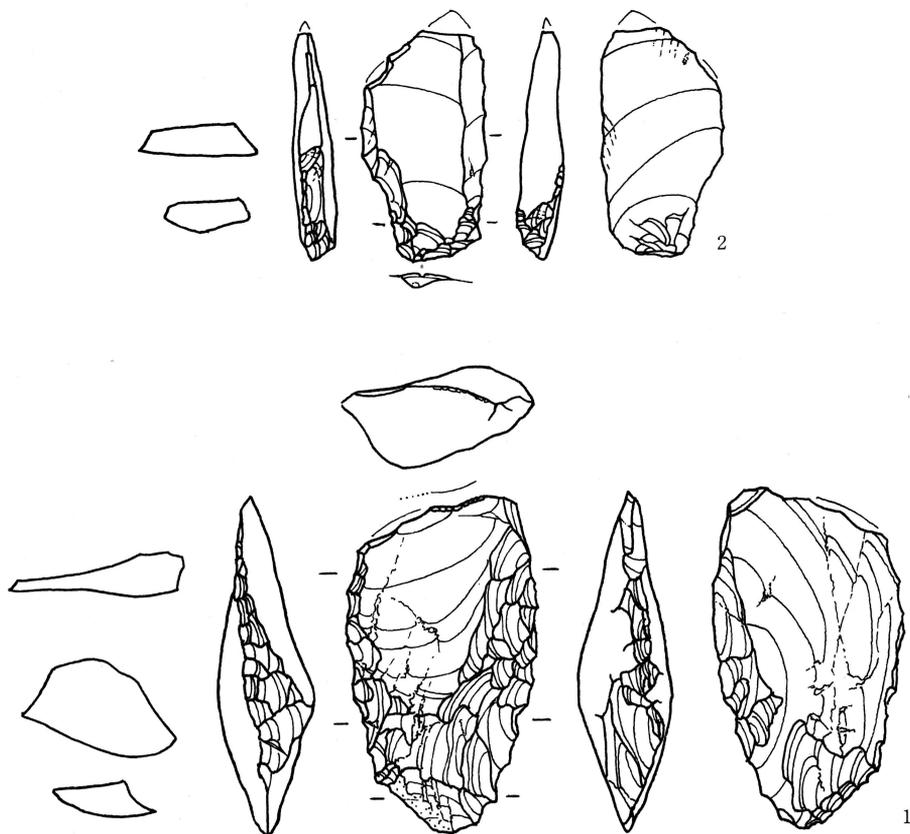


97B区SX01出土の台形石器

はにぶい黄褐色土からの出土が多い。台形石器が2点、搔器2点、使用痕のある剥片30点程、その他200点程が出土した。出土した石器、剥片、石核の石材は、チャート、サヌカイト、黒曜石、ガラス質黒雲母石英安山岩（通称下呂石）、水晶の5種類がある。台形石器は、1はチャートで長さ4.5cm、最大幅2.4cm、最大厚1.3cmを測る。2は下呂石で、先端が欠損しているが現存長2.9cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cmを測る。出土した剥片は横長剥片で、石核の平面形態も横長剥片をとるために適した菱形状を呈しており、これらの資料から台形石器の製作過程を知ることができるものと思われる。

弥生時代後期から古墳時代初め頃の住居（S B02）はB区の北西隅に位置し、A区の南西部分と接している。A区の調査時に住居の北西部分を調査し、焼失家屋であることを確認していた。S B02は東西5.3m、南北4.9mを測る隅丸方形の竪穴住居で、住居内からは柱などの建物の一部を炭化した状態で検出した。住居中央部分では炭化材はみられず、東半分では柱などの炭化材が良好な状態で確認でき、二本一組で使われていたかのような出土状況を示す部分もある。遺物は床面ではほとんどみられず、僅かに残った甕や壺の破片から廻間Ⅱの時期と思われる。

奈良時代末から平安時代にかけての住居（S B04）はB区のほぼ中央でS X01の北側に位置する。S B04は東西4.5m、南北4.55mを測る方形の竪穴住居で北壁の中央からは竈を



第4図 97B区SX01出土の台形石器（1：1）（斎藤基生氏による原図をトレース）

検出した。北壁沿いでは確認できなかったが住居内の壁際には周溝が巡っており、支柱穴も4本検出した。竈の残存状況は良好で東西97cm、南北105cmを測る。しかし両袖部分についてははっきり確認できなかった。焼土層と炭化物層が竈の上部を覆っており、焼土層や炭化物層からは土師器の甕の破片が出土した。竈の前には北西隅に向かう溝が掘られている。また南東隅からは炭化した板材が出土した。遺物は竈と床面から出土し土師器の甕や須恵器の杯などから折戸10号窯式の時期と思われる。平安時代の主な遺構として、土坑（SK53・SK293）と溝（SD01）がある。SK53はB区のやや南東寄り、径50cmのほぼ円形を呈し検出面からの深さ54cmを測る。埋土中から黒笹90号窯式の時期と思われる長頸瓶の底部が出土し、基底部には根石が1点据えられていた。SK293はB区の北東に位置し、長径70cm、短径65cmの方形を呈し、検出面からの深さ15cmを測る。基底部には4点の石が据えられ、その4点の石の中央に折戸53号窯式の時期と思われる碗、皿、長頸瓶がつぶれた状態で出土した。SD01はB区の中央で、東西方向から途中で北西方向に曲がった溝で長さ9m、幅1.4mを測る。溝の中からは折戸53号窯式の時期と思われる碗・皿が多数出土し、一部には「吉」や「長」の墨書が見られる。（小澤一弘）

C区の概要 C区は大洞川の北東側で全調査区の南西端部分、96年度の調査区の南西側に位置する。

造成による地形の改変で現地表下3mより検出した遺構は池、谷状地形を流れる自然流路である。C区南側の池（SG01）の埋土は泥炭層である。この泥炭層中には薄い砂層が何層も水平堆積し、泥炭層上端部からは灰釉系陶器や古瀬戸の水滴が出土したが泥炭層は基本的には無遺物層である。また池の底と思われる青灰色シルト層直上より弥生時代の土器が出土した。青灰色シルト層の下は拳大からなる砂礫層である。谷状地形を流れる自然流路（NR02）からは弥生時代から近世にかけての土器、陶器が出土した。谷には泥炭が堆積し、この泥炭層が何度も浸食を受け部分的には攪乱状態となっていた。なお泥炭層下部よりパレス土器が出土した。（後藤英史）

まとめ 本年度の調査成果としては、旧石器時代の台形石器の出土が特筆される。後期旧石器時代初頭に位置づけられる台形石器の出土により、瀬戸市域のみならず県内の後期旧石器時代では最も古い遺跡になるとともに、尾張地域の歴史が後期旧石器時代初頭まで遡ることが判明したのである。また剥片は横長剥片で200点程出土しており、今後の整理、研究により、台形石器の製作過程が復元できるものと思われる。

96年度の調査では縄文時代後・晩期と中世の遺構が検出されていたが、本年度の調査によって、新たに旧石器時代、弥生時代後期の住居跡、奈良時代から平安時代にかけての住居跡、平安後期の溝、土坑、根石のある柱穴、平安末から鎌倉時代の土坑、溝、柱穴等の遺構を検出した。この他に遺構は検出していないが、室町時代から戦国時代にかけての遺物も出土していることなどから、丘陵斜面から段丘端部にかけて、各時代毎に集落が営まれてきたようである。（北村・小澤・後藤）